

相互に幸せな生活を目指した日本とカンボジアの 家庭科を通じた国際交流に向けた取組み

楠 幹江・山田 俊亮

A Study of International Exchange through Home Economics
between Japan and Cambodia Aiming for a Mutually Happy Life

Mikie KUSUNOKI and Shunsuke YAMADA

要 旨

本稿は、著者らが2016年度から2017年9月までに行ったカンボジアの家庭科に関する調査研究を踏まえ、日本とカンボジアとの家庭科を通じた国際交流のプログラムの開発に資する検証を報告する。日本・カンボジア、双方向から、望ましい家庭科のあり方を考え、真に幸せな生活を構築することを目指し研究を進めている。

キーワード：カンボジア、家庭科教育、被服学、国際交流

1. 緒 言

本研究は2016年度より開始した。カンボジアを主たる地域とし、これまでには家庭科教育の中で被服学を中心に据え、家庭科の授業における被服学の教育プログラムの実施、検証を行うことを目的に研究を進めてきた。本研究にてカンボジアを対象地域として据えたことは、著者らがカンボジア・シェムリアップ州とボランティア事業等を通じて接する機会を得ることとなり、それが端緒となり始まった研究プロジェクトであることによる。また、日本は世界に誇れる家庭科教育の実践国であり^{1) 2) 3)}、家庭科教育に関して多くの学術的知見や知恵がある⁴⁾。それらを通じて、カンボジア・シェムリアップ州の家庭科の教育状況において、調査を実施し、また改善を促す必要性を感じ、研究を実施している。

本研究では、家庭科教育状況や生活に関する調査分析、中学校での家庭科教育のケーススタディ、一般参加型の家庭科を通じた国際交流プログラムのケーススタディといった主に3つのカテゴリーについて進めている。これらの総合的な実践を本研究では目指している。

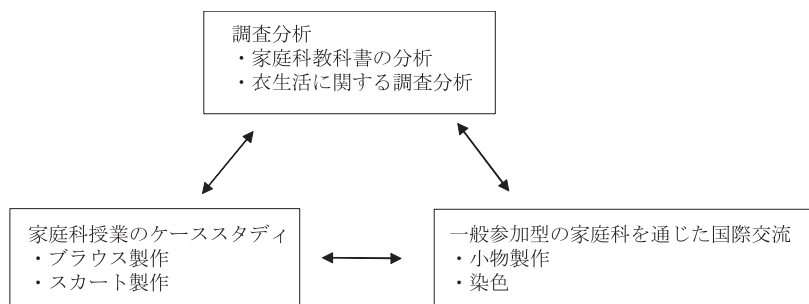


図1 本研究プロジェクトの概要

2. これまでの活動・研究成果（家庭科教育に関する調査研究）の概要^{5) 6)}

カンボジア・シェムリアップ州では、家庭科の授業は、週に1時間程実施されており、教科書（中学1、2、3年で一冊ずつ。教科書は家庭科単独でなく、他に歴史と地理、道徳と公民、社会の3教科と併せて一冊になっている。）を使用して行われている。家庭科分野の内容からは、裁縫と調理に関して多く記述されている傾向が伺えた。しかし、実習授業の環境が整っていない、といったことが主要因として、実習授業が行われることは難しく座学での授業が主となっている。

家庭科教育は、生活事象の科学的な探求やものづくりの学習方法として実験・実習を重視している^{1) 2) 3)}。このため、これらの学習を円滑にすすめ、充実した活動とするために、施設・設備・教材の整備は重要な課題である。本研究にて実習授業を展開するシェムリアップ州バイヨン中学校の状況を把握し、実践可能な状態を整備することとした。教育実践授業のために、中学校側が一般教室を被服実習室として整備し、ミシンおよびアイロン等の機器は、本学から中古のものを寄贈した。実際に送った中古ミシン32台は電動式であった。このため、電気の確保が必要であったが、バイヨン中学の地域は、電気が通っていないため、ソーラーパネルを使用した発電が行われていた。このため、十分な電力が供給されている状態ではなかった。なお、2017年度には電気が通っているとのことであった。

2016年12月にバイヨン中学校における家庭科教育実践（被服教育）を、中学3年を対象に実施した。はじめに、衣生活に関する理解を得るために、約60名の女子生徒を対象に衣服に関する基礎的理解講義（含実験）を1時間実施した（日本人専門家1名、カンボジア人通訳1名による実施）。まず、講義として、人間生活における衣服の役割について、イラストを中心とした資料を用いて説明を行った。また、衣服のライフサイクル〔購入→（着用⇔洗濯⇔保管）→廃棄〕については、健康・安全で快適な衣生活をおくる方法について解説した。次に、実験として、不感蒸泄と素材の関係、及び布の柄の大きさと表現力の関係について実施した。不感蒸泄と素材の関係については、綿100%の軍手とポリエチレン100%の使い捨て手袋を左右それぞれに着用し、5分後の快適性を尋ねた。この実験は、肌着の素材について、どの素材が最適か、検討することを目的としたものである。3種の格子柄の布を使用したブラウスの着用実験では、格子柄の大きさの相違による表現力の違いを検討することを目的としたものである。

ブラウスの製作実習では、中学3年の女子生徒23名と中学校女性教諭2名が実習に参加した。実習は、日本人教員2名が指導にあたり、加えてカンボジア人通訳1名、日本からの大学生2名が授業補助を行った。ブラウスの製作については、時間的な制約があるため、布の裁断、縫い代の始末等は日本で行い、授業では、必要なパーツを縫い合わせるという方式を採用した。題材として取り上げたブラウスの製作は、日本においては、高等学校での製作実習が行われているため、被服製作の初心者には、高度な内容であると言える。あえてブラウス製作を実施するに至った理由は、バイヨン中学校側との事前調整の中で、制服に使えるブラウスの製作要望があったためである。カンボジアの農村部のような場所にあつては、日本の戦後の家庭科の授業がそうであったように、実利性も多分に考慮した家庭科教育が効果的である可能性も考えられると判断した。

バイヨン中学校、延いてはカンボジアにおける特徴的な事項として、中学3年という同学年であっても、年齢は様々であり、理解力やこれまでの技能等に大きく差があったことが挙げられる。しかしながら、本実習においては、被服製作に関してはほとんどが初心者であったため、全員一律の授業を展開した。実際の実習においては、生徒の状況、機器の状況などに応じて、変更せざるを得ない状況が多々生じた。これらの事象から、国際的な教育プログラムの実践においては、時間的、設備的制約が生じやすいという認識を持つこと、そのために指導過程の修正が適宜必要であるという知見が得られた。また、被服の製作実習においては語学を介さないコミュニケーション、指導の場が多いという知見も得た。



図2 バイヨン中学校での家庭科授業及び被服実習の様子⁵⁾ ⁶⁾ (2016年12月)

3. 一般参加型の家庭科の国際交流プログラムの構築のための検証

本節では、2017年3月に一般の方が参加できる国際交流プログラムを志向したトートバッグ製作の実証プログラムを実施したので報告する。トートバッグ製作プログラムについて、プログラムの製作、現地での実証実験を実施した。これらは、被服製作実習におけるミシンの使い方をマスターすることを第一義的に考え、直線縫いだけで完成させることができるトートバックを製作し、被服製作における技術の検証を行ったものである。よって参加者にはミシンの特段の技能等を必要とせず、短時間で終わることができることから、一般参加型という位置づけとしている。将来的には、年齢を問わず、日本・カンボジアの様々な人が参加できる国際交流プログラムとして展開する計画である。

方法：

- 1) 指導者：K大学日本人学生2名、カンボジア人通訳1名、合計3名で実施した。

K大学の学生のうち主担当として指導的な働きをした学生には、あらかじめ、著者らの勤務校に来学してもらい、トートバッグ製作の目的、製作手順、製作実習を行ってもらった。

- 2) 生徒：カンボジア王国シェムリアップ州バイヨン中学生23名（2016年12月にブラウス製作の実習授業に参加した同一集団の生徒）である。
- 3) 製作日：2017年2月7日 14：00～16：30で実施した。
- 4) 製作物：トートバック（素材：綿/ポリエステル35：65の混紡布、サイズ：30cm×35cm、肩紐：1本）布の裁断および接着芯の付着は、全て著者らの勤務校で準備した。
- 5) 製作手順：図3に示した。

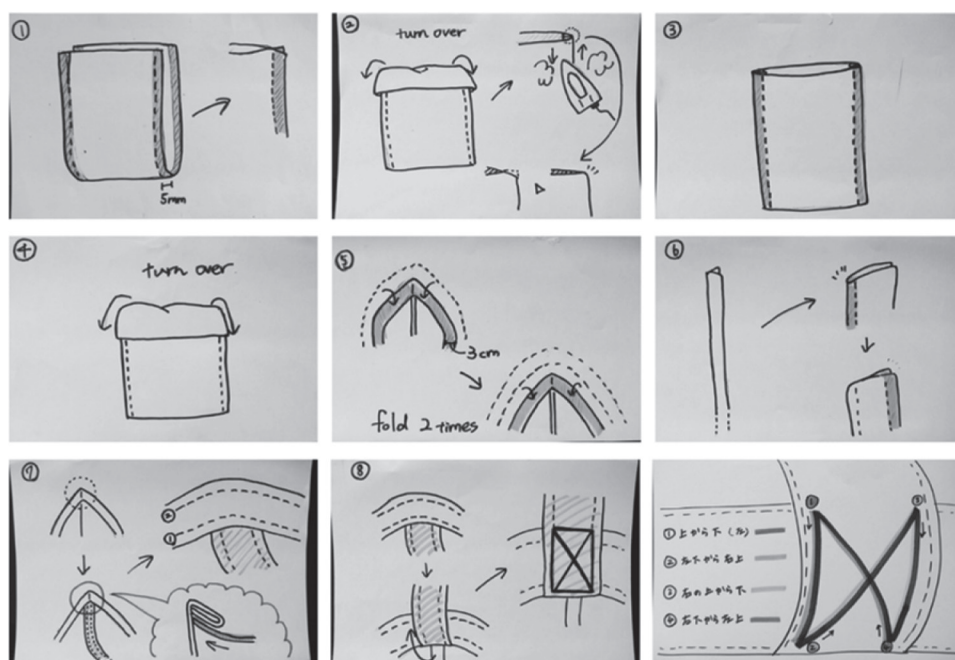


図3 実習で用いた製作手順のイラスト教材

海外で教育支援を行う場合、言語の問題は最大の難点である。ほとんどが通訳を介しての授業となる。家庭科教育の場合、理論的な内容は座学で行われ、実験・実習は生徒による体験型の授業となる。被服製作実習は、体験型であり、座学と異なって、多分に実習の指導を介したコミュニケーションが成立する。このため、既報^{5) 6)}で述べたように、実験・実習を介しての国際交流の有効性及び可能性については十分に認知できる。しかしながら、言語によるコミュニケーション不足は明らかであり、その際に役立つのが動画教材やイラスト教材である^{7) 8) 9)}。次に、指導者の数であるが、今回は3/23の割合であり、約8人に1人の指導者が教育にあたっている恵まれた状態であると考えた。海外での教育支援の場合、経済的・時間的な問題で派遣される指導者は少数である。この場合、少人数でのグループを結成し、グループの中からリーダーにあたる生徒を発掘し育てる方法が望ましいのではないかと考えた。この点については、次の機会に検証を行いたいと考えている。

イラストを有効に使用した授業展開により、トートバックの短時間での製作が実証された。今後は、更に、“つくれるものの提示”を行う必要があると思われる。また、製作する喜びやグループで協力して作業することの大切さに気付くとともに、製作への自信と日常生活に活用しようとする意欲や態度を育てることも確認された。



図4 トートバッグ製作実習の様子

その後、2017年7月には、現地NPO（JST）の主導により、巾着袋の製作実習が自発的に実施された。このように、当該研究プロジェクトを端緒に現地NPOを中心とする家庭科を通じた交流プログラムの実施が自発的に実施される状況も生み出されてきた。

また、次なる展開として、新たな交流プログラムの構築のために、マンゴーの葉を用いた染色実験や本学学生によるスカート製作実習授業の準備等を実施した。マンゴーの葉を用いた染色実験では、染色の材料として、マンゴーの葉を選定して、染色実験を実施した。染色実験は、授業での染色に関する体験のみではなく、被服製品への応用なども想定したものである。図5に、染色実験結果を示す。図5においては、左からA：綿、B：ナイロン、C：アセテート、D：毛、E：レーヨン、F：アクリル、G：絹、H：ポリエステルの実験結果となる。実験結果からは、染色液が酸性であるため、B：ナイロン、D：毛、G：絹といった、たんぱく質系繊維が染まることがわかった。次に、本学学生によるスカート製作実習授業の準備等では、学生の家庭科を通じた国際交流の機会を設けることを目的に、本学の学部生らがスカート製作等の実習の準備作業を行った（図6）。現地での指導や製作した製品の寄贈等の試みを想定している。

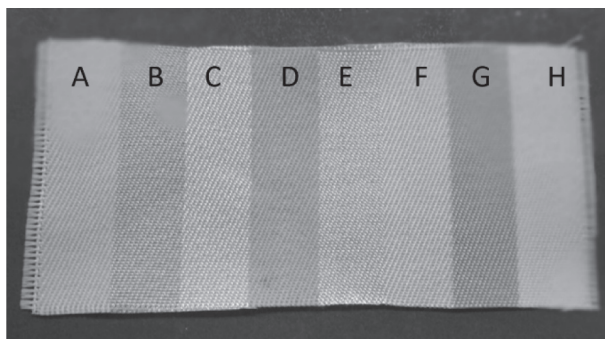


図5 マンゴーの葉による染色実験の結果



図6 本学の学生製作の巻きスカート

4. 論 考

日本における家庭科の現状について述べると、家庭科は小中高の学校の授業においても授業数の削減が進み、家庭科教育の縮小化となっている。加えて、本来、家庭科は家庭において親子間にて継承されるものであったが、こうした親子間での調理や裁縫といった家庭科のコミュニケーションの機会も縮小している。このように、学校・家庭において、家庭科つまりは衣食住といったことについて学ぶ機会は乏しくなっているという課題がある。これらの傾向は、将来においてより顕著になると考えられる。日本における生活の粗悪化が社会的な課題である点において、家庭科教育の縮小化も関係性があるものであると捉えている。家庭科教育の活性化の一つの方策として、家庭科に国際交流・ボランティア教育という新たな要素を加えることを考え、本研究は進めている。家庭科を生涯教育として学ぶ新たなきっかけとなると考えている。

一方、カンボジアにおける家庭科の現状について述べる。カンボジアは1970～90年代初頭の長い内戦により文化・社会が大きく後退し、教育システムも崩壊した。現在でも、学校建設などのボランティア事業も日本のメディア等で報道されるなどのように、教育の改善に向けて進められている。カンボジア・シェムリアップ州の農村部での家庭科教育の現状について述べると、中高の授業においては、家庭科の時間は週一時間程度あるものの、教科書等を用いた座学が主な授業となっており、ミシン等の機材がない、実習を指導できる教員がいない、といった理由で被服製作や調理などの実習は実施されていない状況である。授業の充実化が重要な課題となっており、家庭科における教育状況の改善も望まれる状況にある。また、先述の内戦により現在の母親世代は、教育を受ける機会に恵まれず識字率も高くない状況にある。よって、家庭科についても教育を受けていない。このような状況の中で、家庭において、親子間で充実した衣食住に関する豊かなコミュニケーションがなされる状況とは言い難い。本研究では、カンボジアにおいては、このように学校における家庭科教育の充実化と母親世代への家庭科の生涯教育の学習の機会を提供することも今後実施する計画である。これにより学校・家庭における家庭科教育の充実化を目指す。

上述のように、日本とカンボジアにおいては、状況は違うものの、家庭生活の向上という共通の課題を有していると捉えており、家庭科を通じた国際交流により相互に豊かな家庭生活の構築の一助となるよう取り組む。国際貢献、特に開発途上国における学校教育に関する支援活動は大

学に課せられた重要な責務の一つである、と捉えている。

日本は、世界に誇れる家庭科教育の実践国であるが、その精神には、家庭科が「生きる力」を育てる教科であるという強い信念がある。生きる力を養うために、小・中・高等学校において、段階をおって、知識と技術の伝承が行われている。しかしながら、近年の社会情勢は、生活の基盤である衣・食・住生活において、さまざまな問題を提起している。たとえば、衣生活においては、繊維循環に関する問題や洗濯排水の問題がある。食生活においては、食品ロスの問題や個食・孤食・欠食の増加などの問題などがある。住生活においては、人工環境と換気の問題やハウスダストの問題がある。このように一見豊かな生活であると思われる反面、豊かさの基盤である精神的側面のゆらぎが指摘されている。一方、カンボジアは、内戦後、教育環境も不十分であり、これから、どのような教育を行うのか、その初期段階であると思われる。カンボジアの現状に注目すると、カンボジアの人々が大切にしているものの見方や考え方の中に、日本が見過ごした豊かな生活を導くカギが提案されていると思われる。

ものの豊かさを求めて一直線に進んだ日本の家庭生活と、現状を受け入れ、少ないものに感謝し心豊かに暮らしているカンボジアの家庭生活を比較検討し、ものところの相互交流を軸に学びあい、交流の中で家庭科教育の構築を行うことは、非常に意味のあることであると考ええる。

家庭科教育の学問的基盤を確立したエレン・リチャーズ¹⁰⁾は、家庭こそが幸せな生活の基盤であり、家庭科こそが、生活様式や人間と環境の調和を考える大切な科目であると考えた。日本・カンボジア、双方向から、望ましい家庭科のあり方を考え、真に幸せな生活を構築することを目指し今後も取り組んでいきたい。

謝 辞

著者らは、本研究に関して多岐にわたるご協力を頂いた小出陽子氏をはじめとするJSTの皆様、関西学院大学の谷垣萌氏をはじめとする学生の皆様、バイヨン中学校の皆様、本学非常勤職員の平本登美恵氏に厚くお礼申し上げます。なお、本研究は日本学術振興会科学研究費補助金(挑戦的萌芽研究・課題番号第16K12695号)による成果の一部です。

引 用 文 献

1. 文部科学省：小学校学習指導要領 家庭。(2008)
2. 文部科学省：中学校学習指導要領 技術・家庭。(2008)
3. 文部科学省：高等学校学習指導要領 家庭。(2009)
4. たとえば、楠幹江。(2003)健康科学としての家政学。大学教育出版。pp. 1-49
5. 楠幹江，山田俊亮。(2017)カンボジアにおける家庭科の被服教育に関する研究—シェムリアップ州バイヨン中学校での事例—第1報：現状と課題 生活デザイン学会誌，第7号，pp. 2-9
6. 山田俊亮，楠幹江。(2017)カンボジアにおける家庭科の被服教育に関する研究—シェムリアップ州バイヨン中学校での事例—第2報：被服製作の実施 生活デザイン学会誌，第7号，pp.10-19
7. 葛西美樹，工藤寧子，奈良拓哉。(2014)被服構成実習支援のためのマルチメディア教材開発と効果的運用方法 東北女子大学・東北女子短期大学紀要，53号，pp.46-52
8. 西田順子。(2016)家庭科教育法における製作活動の教育的意義 樟蔭教職研究，第1号，pp.9-86
9. 高橋良子，横堀秀子，真鍋彰子。(2005)被服構成実習科目における情報機器の導入について：授業改善のための学生アンケート調査より 文化女子大学紀要，服装学・造形学研究 第36号，pp.45-60

10. E. M. ダウティー. (2014) アメリカ最初の女性化学者エレン・リチャーズ, ドメス出版

[2017. 9. 28 受理]

コントリビューター：山下 明博 教授 (造形デザイン学科)